

薬局 だより

KI PHARMACY

2023年6月号

夏の感染症



お薬や健康に関するお悩みは、お気軽にケアーアイ調剤薬局へご相談下さい。

子供の3大夏風邪

夏になると増えてくるのが3大夏風邪です。

① 手足口病

② プール熱

③ ヘルパンギーナ



幼児を中心に、これから6～8月にかけて感染者が増えます。

① 手足口病

症状：手のひら、足裏、口の粘膜などに**発疹**や**水疱**。

まれに急性脳炎を引き起こす可能性がある。

流行の中心：4・5歳くらいまでの乳幼児

潜伏期間：3～5日。感染力が強いため、潜伏期間中でもうつる。

感染経路：咳などの飛沫感染、接触感染、排泄物による糞口感染。

※手足口病の病原ウイルスであるエンテロウイルスは、症状が回復した後も1ヶ月間程度は便から排泄されます。また、感染しても症状が出ない不顕性感染もあることから、保育園や幼稚園などの集団生活施設においては、**手洗いの励行と排泄物の適切な処理**が重要です。

② プール熱（咽頭結膜熱）

症状：結膜炎、咽頭痛、発熱（3つの症状が同時に現れることのないケースもあります。）

急な発熱で発症し、咽頭炎による**喉の痛み**が現われる。また、**結膜炎**に伴って、充血・目の痛み・かゆみ・目やにがでたり、まぶしくなったり涙が止まらなくなったりする。これらの症状は3～5日程度続く。

流行の中心：4・5歳くらいまでの乳幼児

潜伏期間：5～7日間

感染経路：飛沫感染、接触感染、糞口感染。**塩素濃度管理の不十分なプールでうつることからプール熱と呼ばれている。**

※プール熱の病原ウイルスであるアデノウイルスは、感染力が非常に強く、症状が治まった後も、咽頭からは7～14日間、便からは30日間程度は排泄されます。このため、患者からの二次感染にも注意が必要です。手指や飛沫を介して感染するので、**手洗い・手指消毒やうがい、身の回りの消毒**を行うことが大切です。

③ ヘルパンギーナ

症状：急激な発熱と口内炎、口腔粘膜にあらわれる**水疱性の発疹**

突然の発熱（必ず熱が出るわけではない）に続いて、口蓋垂(のどちんこ)の炎症、口内の水疱や水ぶくれが確認されるようになる。そのため、**食べ物を摂取する際に喉に強い痛み**を伴うケースが大半。

流行の中心：4・5歳くらいまでの乳幼児

潜伏期間：2～4日間

感染経路：飛沫感染、接触感染、糞口感染

※ヘルパンギーナの病原ウイルスであるエンテロウイルスは、急性期にもっとも感染力が強いウイルスですが、回復後にも2～4週間の長期にわたり便からウイルスが検出されることがあります。予防法としては、**感染者との密接な接触を避ける**こと、流行時に**うがいや手指の消毒を励行**することなどです。

Q. プールに入っているの？

夏はプールを介した皮膚の感染症にも注意が必要です。皮膚に感染症状がある場合、プールに入っているのかどうか悩む保護者の方も少なくないと思います。平成27年5月、日本臨床皮膚科医会・日本小児皮膚科学会・日本皮膚科学会より示された見解は以下の通りです。※学校・保育園・幼稚園・施設等によって、独自の基準を設けている場合もありますので、必ず学校などに確認をとりましょう。

1) 伝染性膿痂疹（とびひ）



かきむしったところの滲出液、水疱内容などで次々にうつります。プールの水ではうつりませんが、触れることで症状を悪化させたり、ほかの人にうつす恐れがありますので、プールや水泳は治るまで禁止して下さい。

(解説) とびひの主な原因菌である「黄色ブドウ球菌」「溶血性連鎖球菌」は塩素濃度が適正に管理されたプールでは増殖しにくく、プールの水を介した感染拡大は考えにくいと言われています。ただし、黄色ブドウ球菌の感染力が強いので、直接接触したり、タオルやビート板などを介したりすることで感染が拡大すると考えられているため、医師から治療終了と判断されるまでは、物を共有することはもちろん、プールの利用も禁止した方がいいと判断されています。

2) 伝染性軟属腫（みずいぼ）



プールの水ではうつりませんので、プールに入っても構いません。ただし、タオル、浮輪、ビート板などを介してうつることがありますから、これらを共用することはできるだけ避けて下さい。プールの後はシャワーで肌をきれいに洗いましょう。

(解説) プールの水を介して水いぼに感染したという報告はなく、世界的にも水いぼができていてもプールを禁止する必要はないと言われています。ただし通常水いぼは、直接皮膚が接触したり、タオルなどを介して間接的に接触したりすることで感染するので、タオル、ビート板、浮き輪などを共有するのは避けましょう。

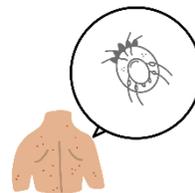
3) 頭虱（あたまじらみ）



アタマジラミが感染しても、治療を始めればプールに入っても構いません。ただし、タオル、ヘアブラシ、水泳帽などの貸し借りはやめましょう。

(解説) シラミは、水中でも髪の毛にしっかりくっついており、プールの水を介してシラミに感染することは考えにくいと報告されています。ただし塩素で死ぬことはなく、タオル、クシ、水泳帽子を介して感染することがあるので、共有しないようにしましょう。

4) 疥癬（かいせん）



肌と肌の接触でうつります。ごくまれに衣類、寝床、タオルなどを介してうつることがありますが、プールの水ではうつることはありませんので、治療を始めればプールに入っても構いません。ただし、角化型疥癬の場合は、通常の疥癬と比べ非常に感染力が強いので、外出自体を控える必要があります。

(解説) まれにタオルなどを介して感染することがありますが、プールを介して疥癬に感染する可能性は低いと言われています。